

# 授業評価と試験評価の関連性に関する一事例研究

大橋 智樹

(宮城学院女子大学)

Key words:

FD(Faculty Development)推進の一環として、授業評価を取り入れる大学が多くなってきている。文部科学省の調査によると、平成13年度で76%の大学が実施している。しかし、この授業評価は、どのような要因に規定されるのか、また、それらに基づいてどのように活用したらよいのか、といった研究は少ないことが現状である(星野・牟田, 2003)。残念ながら大学教育現場においても「とりあえずやっておく」とか「結果を見ておく」といった程度が実情であろう。

そこで、本研究では、発表者自身がおこなった授業評価の事例研究を元に、授業評価のあり方について検討した。

## 方法

**被験者:** 仙台市内にある私立大学の文系学部に所属する大学生 298 名 (M女子大3年生 78 名、S女子大1年生 105 名、T大1年生 115 名 (うち男子学生 86 名))。

**手続き:** いずれも発表者の担当する授業における 2005 年度後期末試験直後に、口頭で質問をし、回答を答案の余白部に書かせた。M女子大においては、さらに、無記名の授業評価質問紙(9問)に答えさせた。

**説明と同意:** 調査前に、回答と成績評価とはいっさい無関係であることを確約し、さらに、統計的なデータとして公表の可能性があることに同意しない場合には回答を拒否できることを伝えた。

**試験直後の口頭での質問(全被験者):**

- 1) テストの難易度(5段階)
- 2) テストの自己採点(100点満点)
- 3) 授業全体を通じた総合評価(100点満点)

回答への動機づけを高めるため、テストの自己採点については配点および採点基準を口頭で説明した上で、実際の採点と同一の得点には5点の加点をすることを伝えた(実際に加点対象になった学生はいなかった)。

**授業評価質問紙(M女子大のみ):**

岡山大学 FD 専門委員会作成「授業評価アンケート」参考にして一部改変したものを用了。

- 1) この授業全体に対するあなたの評価を総合的に5段階で表して下さい。
- 2) 担当教員の授業に対する熱意・意欲を感じた。
- 3) 教科書の選定、参考書の紹介、資料の配布は、適切であった。
- 4) 板書や視聴覚機材の利用は、適切であった。
- 5) 講義や説明は聞き取りやすく、理解しやすかった。
- 6) 授業全体のスケジュールや1回の授業の時間配分は適切であった。

7) 予習・復習についての指導や宿題・課題・レポートの指示は適切であった。

8) この授業の予習・復習や宿題・課題・レポートなどに積極的に取り組んだ。

9) この授業を受講することで、この分野の重要性をさらに深く認識するようになった。

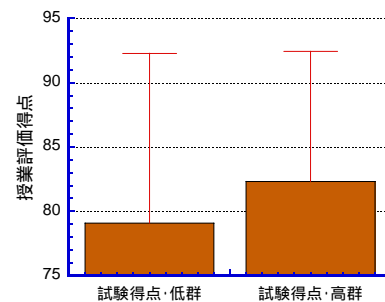
## 結果と考察

### 試験難易度評価と他指標との関連

難易度評価を中央値に基づいて高群・低群に分けて両群を比較したところ、試験得点および自己評価得点において有意差がみとめられた(それぞれ、 $t(296)=3.39, p<.01$ ;  $t(290)=5.29, p<.01$ )。いずれも

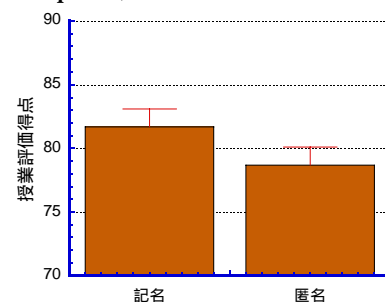
### 授業評価の高低と他指標との関連

試験得点と自己採点において、授業評価の群間に有意差あり ( $t(292)=-.24, p<.05$ ;  $t(290)=-2.30, p<.05$ )



### 記名と匿名の授業評価の差

記名での授業評価と匿名での授業評価に有意傾向? ( $t(151)=1.62, p=.11$ )。



## 引用文献

星野敦子・牟田博光(2003)大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因 日本教育工学会論文誌 27 p.213-216.

(OHASHI Tomoki)